

asexual race と同様に 2 つの繁殖時において区別の出来る 2 つの races が認められる。この 2 つの races と地理的な分布との関係は現在では言及できない。

分類學上、分布學上興味ある日本産蟹類について 酒井 恒 (横浜大・学芸)

1. 六脚の蟹 *Lambdophalus* 属 (type: *L. sexpes* Alcock) は属の特徴である胸部腹枝第一節の横の溝と 8 の交接肢が逆 L 字状である点で古来知られている *Hexapus* 属 (type: *H. sexpes* Fabricius) と区別されたが、これらの相違点は種的のものと思う。*Lambdophalus* 属は *Hexapus* とすべきで *L. sexpes* は新名で呼ばるべきである。

2. ナキガザミ (*Neptunus (Hellenus) nipponensis* Sakai) の allotype に指定さるべき ♀ が尾鷲附近の磯で採集された (松阪市・田中信一氏採集)。8 と同様に stridulating organ が発達している。

3. 次の 3 種は日本近海で最初に記録される熱帯性の蟹である。

Caphyra rotundifrons A. Milne-Edwards (Portunidae) —— 八丈島

Quadrella coronata Dana (Xanthidae, Trapeziinae) —— 伊勢湾答志島 (松阪市・田中信一氏採集)

Epigrapsus notatus (Heller) (Gecarcinidae) —— 八丈島

4. タカアシガニ (*Macrocheira*) と砂蟹 (*Ocypoda*) の分布は房総以南に限られていたが岩手県にまで北上している。房総以北において continuous であるかどうか今後の調査に俟ちたい。

5. 八丈島においてスナガニの幼蟹個体を得た (*Ocypoda cordimana*)。岩礁の礫のみで adult は得られない。本年 7 月 18 日の南紀の洪水の流水が 8 月上旬多数三宅八丈に漂着すること沿岸性蟹類幼生の浮遊生活の期間が 4~5 週間であるので本土からの幼生の漂着が考えられる。

問 六脚蟹の棲息状態につき伺いたい。私の臆な記憶ではシナブタの孔の中に共棲していたと思うが。(大島広) 答 文献では単に Annelida としてあるきりであるが、シナブタと共棲していることは、三宅貞祥氏からも伺っている。相模湾などの大型の六脚蟹は地曳網で獲れるが、自由生活をしているようにも考えられる。問 発音器官をもつカニに何か聴音器官が認められるか。(松本邦夫) 答 コメツキガニ類の胸部の長節にある tympanum は、聴音するのではないかと思われるが、他の種類で聴音の働きをすると思われる器官は知られていない。

八丈島海産軟体動物の特殊性 滝 庸 (国立科学博物館)

八丈島で採集した海産軟体動物の中で、これまでに同定し得た種類は 492 種で、わが国全体の 13% 余に当る。その組成は、ヒザラガイ類 14 (2.7%), 腹足類 422 (86%), 斧足類 51 (10.2%), 頭足類 5 (1.1%) で、腹足類は斧足類の 8 倍余である。わが国の全種類については、腹足類は斧足類の約 3 倍弱であるから、ここは腹足類の種類が非常に多いことがわかる。未同定の種類に腹足類が多いので、この傾向は今後更に増すものと考えられる。

これらの分布は緯度によつて 6 群に分けた。温帯群 (31°~41°N): 58 種 (11.9%), 暖帯群 (25°~35°): 53 (10.7%), 広暖帯群 (0°~35°): 266 (54.1%), 熱帯群 (0°~31°): 68 (13.7%), 広分布群 (0°~50°): 40 (8.2%), 特産 7 (1.4%)。これによつて温帯群と暖帯群とはほぼ等しいが、温帯群より熱帯群の方が多いこと、広暖帯群が過半数を占めていることから、暖海の分布相を呈している。*Pondorkis*, *Lodderia*, *Titiscania*, *Rocheffortina* の諸属はわが国ではじめて発見された。ベニヤカタガイ、ホソムシロ、カスリタマキビなど熱帯種がここに分布しているので、四国・九州の同緯度のところと較べて、更に南方の種類がここまで分布している。これは暖流の影響を考えさせるに充分である。

深海貝類の隔離と分化 大山 桂 (地質調査所)

深海の貝類は調査が不充分であるために生物地理学的に論ぜられた例が少い。筆者はさきに本邦 (内地)

の太平洋側と日本海側とを比較して共通種が少いことを指摘した。同じことが日本とカリフォルニアとの間にも成立つ。深度 100~300 m 位に産する貝類には少数の共通種があるが 300 m 以深では属は共通して種は共通しなくなる。この事実を歴史的に見れば、地史学上では北極南極の位置は一定ではなく、氷期・間氷期による海況の変動もあつて、これら諸原因により分布が拡大したり縮小したりして現在に至つたものである。そして日本から南北アメリカの太平洋岸を通つて南極の周辺に至る分布を示す属もある。しかし一寸離れた所には別種を産し、海況の違ふ所に居て分化し、隔離の効化を暗示した。

日本の海産貝類の分布について 波部忠重（京大・理・動）

今回は貝類の中、二枚貝類の分布について述べる。日本各地の二枚貝類の目録によつて、調査地点の各々の種の分布の中心緯度を求めて（二枚貝の分布は黒田・波部 1952 の check list にその後の資料を加えたものによつた）、更にそれ等二枚貝類群の分布の中心緯度の中央値を算出して、その地点の実際の緯度と中央値の示す緯度との差を求めた。そして、日本沿岸の各調査地点の全般的傾向を考察すると太平洋沿岸では実際の緯度より中央値の示す緯度は南に偏するが、但し、噴火湾以北では中央値の緯度は実際の緯度と殆んど等しいか、時に北に偏する。噴火湾と函館との間で中央値の緯度が南に偏する割合に等しい差が出来る。それ以南では東北沿岸は資料に乏しいが、中央値の緯度が南に偏する割合が北で大きくて二枚貝相に著しい差のないことを示す。それより以南種子島までは、外洋に面したところでは南の調査地点程中央値の緯度が実際の緯度より南に偏する割合が急激に増加して二枚貝類相に著しい変化のあることを示す。しかし一面内湾ではそれ程著しく中央値の緯度が実際の緯度より南に偏しない。これは前者は黒潮系の二枚貝類を主とし、後者は大陸沿岸系の二枚貝類を主としているためである。日本海沿岸では各地点すべて中央値の緯度は実際の緯度よりも南に偏する。亜庭湾でも尚この傾向がある。しかし北海道余市までは北の地点程中央値の緯度は実際の緯度より多少南に偏する割合が大となるが、あまり著しい変化を示さないのは、日本海の二枚貝相がゆるやかに変化していることを示す。

問 分布の中心緯度の中央値の決定の場合、棲息密度を考慮する必要はないか。（北沢右三） 答 この場合には考慮に入れない。 問 山形県産貝類についての材料をとられたとき、飛鳥産の貝類も入れているか。（阿部襄） 答 入っていない。野村七平氏の山形県貝類目録によつた。

主としてヒドロゾアより見た北日本海産動物の分布について 山田真弓（北大・理・動）

筆者は主として北海道各地沿岸にて採集せられた 40 余種のヒドロゾアのうち代表的なる 21 種をえらびその分布につき検討した。現在迄は概説的に、函館附近及び日本海沿岸は暖流系、室蘭附近は暖流寒流混合系、厚岸根室附近は寒流系といわれてきた。然し詳細に検討すれば、更に複雑な分布型を示すことが明かになつた。特に室蘭より函館江差附近、及び利尻礼文両島附近には独特のファウナが見られる。これを他の底棲性海産無脊椎動物群の Anthozoa, Polychaeta, Mollusca, Crustacea などの分布と比較しても大体同じことが云い得る。即ち北海道沿岸の海産動物の分布は極めて複雑であり、北海道沿岸にいくつかの明確な分布の境界線をひくことは困難であると考えられる。

日本産 *obscura* ショウジョウバエについて（第 3 報）

森脇大五郎・岡田豊日・大羽滋・黒川治男（都立大・理・生）

過去 3 年間の調査の結果本邦に棲息する *obscura* 群ショウジョウバエとしては *Drosophila bifasciata* 及び *D. alpina*（殆ど Burla の原記載と一致）が知られ*、殊に *bifasciata* はやや寒冷な気候に値する優勢な一野生種であり、各地の森林地帯に広く棲息すると信じられるに至つた。しかし両種共出現は夫々緯度、標高、季節によつて異つてゐる。先ず *bifasciata* について見ると北海道地方では 7, 8 月頃に 1300 m 辺か

* この他に小樽水高の高田春夫氏は *D. helvetica* に類似の 1 種（雄 1 匹）を大雪山で採集されている。